

教育改革につなげる入試改革と高大接続 ～アサーティブプログラム・アサーティブ入試の事例から～

追手門学院大学

志村知美 牧野梨緒 木村真希 熊谷響希

1 はじめに

2013年1月、新しい職場での初仕事は在学生へのヒアリングであった。衝撃だった学生たちの実態から、私たちの入試改革は始まった。「追手門学院大学でいいねん」から「追手門学院大学がいいねん」への意識改革への挑戦である。

アサーティブの取組を始めた目的は、本学で学ぶ目的や意欲を基礎学力も含めて「入試前」から育成し、入学後は主体的に学び・行動して成長していくことができる学生を数多く入学させたいことである。2012年、当時の学生生活実態調査では、本学を第一志望として入学した学生の割合は12.7%だったが、2018年度では46.9%となり、2019年度には52.5%とまでなった。

2014年度にスタートした本学のアサーティブの取組は、全国的な入試改革の動きの中で、他に類を見ない先進性や新規性もあり、当初から学内外で過剰なまでに期待され、神経質なほどの検証を求められた。このことは、同年度から開始された文部科学省の「大学教育再生加速プログラム」の入試改革領域で採択され（私立大学では本学のみ）、2017年度の中間評価で「S」評価となったことで、更に加速されることになった。

私たちには、これまでを振り返り、評価できることや改善を要することを明らかにして、期待と検証結果に応えるべく、一層の発展を期す責任があると考えます。

入試改革としてスタートしたが、入学したアサーティブ生を通じ、データと学生の実態から入試改革から教育改革へ繋げる必要性を実感した。

アサーティブプログラムとアサーティブ入試の事例から、入試改革から入学後の教育接続の必要性について報告する。また本日は、アサーティブプログラム・アサーティブ入試で入学した学生たちの想いをお伝えする。

以上